

---

# SWitch

夏岸希菜子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Switch

### 【Nコード】

N0569W

### 【作者名】

夏岸希菜子

### 【あらすじ】

争い事は苦手なのにも関わらず、魔性の退治を依頼され、断りきれずに森へ入ることになった青年アズ。その森の中で包帯まみれの小さな少女グレイスに出会う。アズとグレイスの魔性退治（！？）の旅が始まる……。主人公たちがトラブルやら揉め事やらに巻き込まれつつ、行ったり来たりする話になる予定です。

基本的に不定期更新の予定です。

## 蜘蛛の巣 1

アズは困った。

腕や顔が傷だらけなのは決して争いごとが好きだからではない。村に入る少し手前で怪我をした猫を見つけ、手当てしようとして引っかけたせいだ。左目を眼帯で覆っているのは歴戦の古傷を隠すためなどではない。確かに、人には見せたくないものだから隠しているが、傷などないのだ。

第一、アズは治癒系統の魔術しか使えないし、刃物も大の苦手だ。

一体どこからそういう話になったのだろう。

宿の一室。アズの前にはトトナ村の長がいて、事情を説明し続けていた。

「このままでは村の存続に関わるのです」

「はあ……」

村民たちの目には、アズが血気盛んな青年に見えたらしいのだ。

泊まるうとした宿には村長が直々にやって来て、魔性<sup>まじょう</sup> 人間以外の魔術を使う生物のことだ。一般的に、人間は魔性に対して良い印象を抱いていない の退治を依頼してきたのである。

村長の話の聞くとところに因ると、村から程近い森の中に魔性が出て、森に出掛けた村人が次々に失踪しているらしい。そこで、村で大枚を叩いて魔性退治の募集広告を出したのだが、退治のために現れた屈強な男たちも戻って来ないのだと言う。それが、約三ヶ月前の話。つい一昨日には、村の若者で隊を組んで討伐に出掛けたが、やはり帰って来ていない。

アズは思った。これをまともに請け負ったら死ぬ。屈強な男でも、複数でも駄目だったのだ。力自慢ですらないアズが一人行ったところで、退治は不可能だ。

しかし、トトナの村長は、これが最後の望みとでも言いた気だっ

た。断わっても断わっても食い下がり泣き付くのだ。良い年をした男があまりにも本気で泣くので、アズは若干引いていた。しかし、ここまでされては無碍むげにできないではないか。だが、村長のあの話を聞いて退治をしようと思うのはただの無謀というものだ。

という訳で、アズは困っていた。

退治はできない。だが、説得くらいならできるかもしれない。意外と知られていないことだが、魔性が人間に危害を加える時には、大抵人間側に理由がある。単に肉食なだけのこともあるが、通常、何の理由もなく人を襲うことはないのだ。

アズが最初に出会った魔性もそうだった。彼女は怒っていた。そして、悲しんでいた。息子が人間の放った矢で傷付き、生死の境をさまよっていたのだ。彼女は暴れ、アズの暮らしていた村を襲った。当時、幼かった彼は彼女の出した条件を飲むことしかできなかった。恐ろしかった。だが、条件さえ飲めば村を救うことができるのだと自分に言い聞かせた。すると彼女は、条件を飲んだ彼を傷付けたりはしなかった。それどころか、村に戻れなくなったアズに、彼女は「あなたは私の子よ」と言いしばらくの間面倒を見てくれたのだ。

そんな過去のおかげで、アズは魔性に対してあまり悪い印象を持っていなかった。魔性を一概に悪と決めつけている人間のほうがむしろ嫌いだった。そんなことを言えば異端視されるのがオチだから黙っておくが。

「ですから村としましては魔性を退治して下さいたあかつきには、報酬は差し上げますし」

トトナ村長は涙ぐみ、土下座した。

「この通りです！」

「さつきから言ってますけど退治なんてできません。顔を上げてください」

「そこをなんとか」

こんな会話も本日十回目になる。毎度の如く平伏されると、アズ

は何だか悪いことでもしているような気がしてくるのだった。

それでつい、言ってしまった。

「わかりました」

口が滑った。

まずい、と思ったときにはもう遅かった。

眼前に、涙に濡れた中年男の顔が迫る。本人には失礼だが、はっきり言つて目の毒だ。

「ああありがとうございます恩に着ます!」

「ですが」

退治ではなく説得で良いか、尋ねようとして言葉を切られた。

「では早速準備をば!」

トトナの村長は足早に去って行く。何を準備する気なのか。防具はともかく、剣は論外だ。アズは飽くまで説得に行くのだから。

面倒なことになった。トトナ村長の暴走からすっかり置いてけぼりのアズは嘆息した。

村長から教えられた道に沿って、トトナ村から歩くこと十五分。

徒歩十五分とはいえ森の中だ。切り倒された木が数本あり、切り株が残っている。そこに、彼女は座っていた。

小さな女の子だ。年は十二、三歳だろうか。灰色の、長い髪は二つにくくつてある。服装はぼろぼろで薄汚れていて、なにより目に付いたのはその肌を覆い尽す程に巻かれた包帯だった。指先から足元まででは飽き足らず、顔にまで包帯が巻いてある。あまりにも奇妙な格好だった。

……本当に怪我だろうか。

少女は近付いてきたアズに気づき、顔を上げた。包帯で隠された肌の隙間から、青く丸い目がアズを見つめていた。

「あなた、だれ?」

アズが名乗ると、少女は自分の名はグレイスだと応えた。

「グレイスと呼んでね」

どうしてかはわからないが、彼女はどこか哀しそうに見えた。

「グレイス どうしてこんな所に？ この周辺に魔性がいるらしいって聞いたけど」

アズは怪訝に思い、聞いた。

「あたしね、あそこにある小屋に住んでるの」

すると彼女は体を捻って背後の森を指差す。目を凝らせば、確かに木で出来た小さな建物があるようだった。

「もうしばらく前なんだけど、魔性の怒りをおさめるためって、あたしが供物くもつになったの。それからずっとあそこで暮らしてるのよ」

そんな話は聞かなかった。あの村長はわざわざこのことを隠していたのだろうか。どうせすぐにバレるといふのに。

グレイスがぴよんと跳ねて立ち上がる。彼女の髪は、起立してなお引きずりそうな程に長かった。

「あたし、久しぶりのお客様で嬉しいの。ねえアズ、少しお茶してってちょうだい！ 魔性のことも、あたし詳しく教えられるわ」

グレイスがアズの腕に体重を掛けて引っ張る。ずっと一人きりで寂しかったのかもしれない。彼女は少しはしゃいでいた。

まあ、少し話し相手をするくらいなら良いだろう。

アズは少女についていくことにした。

## 蜘蛛の巣 2

小屋は朽ちかけていた。

さすがに屋根に穴は空いていないだろうが、蔓性の植物が絡まり傾いている。小屋の脇にある井戸も、石で出来ているがヒビが入っていた。そして、何かが腐っているらしく、どこからともなくすえた臭いがするのだ。

嫌な臭いだ、とアズは思った。

一方、グレイスは慣れてしまっているのか、元氣そうにしている。「古くて雨もりもひどいけど、住めば都なのよ。ゆっくりしてってね」

グレイスがアズを招き入れる。

小屋の中は、予想を裏切らない薄汚さだったが、それでも少女が住むだけあつてきちんと整理はされていた。

しかし、臭いは中に入るとさらに強く鼻を刺激した。よく平気でいられるものだ。

「さ、座って座って！ お茶って言うってもお水しか出せないんだけど」

言いながら欠けたグラスを差し出すグレイス。アズが席に着くと彼女も向かいに腰を下ろした。

しばらく辺りを見回していたアズは、グレイスの背後に出入口とはまた別のドアを見つけた。この小屋は一部屋だとばかり思っていたが、別に寝室があるようだ。

話を聞かせて欲しいとグレイスがねだったので、アズはこれまで見てきたものの話をした。それほど珍しい話ではなかったが、彼女は目を輝かせて聞いていた。

話が尽きかけた頃、ふとアズは不思議に思っていたことをひとつ思い出した。

「そつえば、さつきからずっと気になってたんだけど、その包帯

は、怪我か？」

「違うの。これは あかねっ、あたし本当はね……っ」  
不意に、グレイスが泣きそうな震えた声を出す。

「どうした？」

「うっん、やつぱりなんでもない」

グレイスは萎れたように俯うつむいてしまった。何かまずいことでもしただろうか。

グレイスに、触れられたくないことを尋ねてしまったのかもしれない。

いくら幼いとはいえ一応女の子の部屋な訳だから、じろじろと見  
てはいけないのかもしれない。

「アズ、ごめんなさい」

いつの間にか、グレイスは青く澄んだ瞳を潤ませていた。アズは  
何が起こったのかわからず困惑した。

なぜ謝るのか。訳が分からない。

とりあえず、彼女の傍に寄って頭を撫なでてやる。彼女の涙は、流  
れることなく顔を覆う包帯に吸い込まれていく。

「大丈夫だから、落ち着いて」

包帯の巻かれた小さな手がアズの衣服を強く引っ張った。

「お願い、助けて。あたしを一人にしないで。どこにも行かないで  
ずっとここにいて」

彼女が泣きながら愛の告白じみた台詞を述べたのを、アズは聞い  
た。

今日一日で泣き落としが二人目だなあ、と頭を掠かすめたが、問題は  
そんな下らないことではない。

アズはいつか、どこかに定住したいと考えている。どこかはまだ  
良く分からない。しかし、その場所はここではない。今でもない。  
完全に二人きりのおんぼろ小屋ではないのだ。

「悪いけど、それはできないよ」

グレイスの頭を優しくぼんぼん、と叩きながら、アズは諭さとすよう



に彼女に言い聞かせた。

「ずつとは無理だ」

ふるふる、と彼女は震えていた。ただ寂しさで泣いているのだと思っていた。

変化は、すぐにやって来た。

「ああああああ　ッ」

「え……」

グレイスが奇声を上げた。髪を乱し、暴れる。彼女の瞳は紅く明滅していた。乱した髪が強く波打ち、アズは一步、後退る。

「だめよ、そんなの許さない」

強い口調で彼女は言った。

「どうして……」

グレイスが魔性だったのか。

だが、彼女は確かに助けてと言った。彼女は助けを求めているのだ。

もしかすると、グレイスは供物として　この魔性に取り込まれてしまったのかもしれない。

魔性と人間は、稀なことだが、ある条件を満たすとき、融合してしまうことがある。体だけではない。心まで溶け合うのだ。完全にひとつになる。だが、ふとしたきっかけでバランスを崩したとき、どちらかが優位に立ってしまう。

現在の彼女は、魔性に意識を奪われかけているように思えた。

いざというとき逃げられるよう、アズはさらに出口へと下がるうとした。

「逃がさないわよ」

グレイスが髪を逆立てる。するとまるで蛇のようにうねり、四方から蜘蛛くもの糸の如く伸びた灰色の髪がアズの四肢を絡め捕る。

身動きが取れなかった。動こうとすればするほど拘束はきつくな

っ  
ていく。締め殺される前に、アズは逃げるのを諦めた。  
この魔性が、肉食でないことを祈る。  
「グレイスの 望みは何？」

「取引しないか。俺は、人に危害を加えるのを止めて欲しいんだけど。止めてくれるなら、代わりにひとつ、望みを聞く」

交渉の開始だった。

苛立ちを隠さず魔性グレイスの口許が歪む。

「さつきから言ってるじゃない。ずっと、死ぬまで、永遠に、アタシから離れずここにいなさいって」

嫌な条件だ。できればお断りしたい。

「そう言えば、他の人たちは？」

断ったらどうなるのか。それが知りたかった。

「ここに来た人たちはアタシの正体を知って逃げ出そうとしたのよ。ひどいでしょ？ だから、逃げ出せないように閉じ込めたの。最近、アタシを殺そうとする人も多いけど、そういうのもきつく縛って閉じ込めといたわ。もしアズがおとなしくしてくれるなら、自由にしてあげてもいいのよ、この小屋から離れなければね」

つまり、消えた村人たちは、もう一つの部屋に押し込められているということか。少なくとも、しばらくは生かされるようだ。

しかし、どうしてそこまでこのおんぼろ小屋にこだわるのか。グレイスのほうがアズについてくれば、トトナ村の問題もすぐに解決できるだろうに。

そんなことを考えていると、彼女はアズの左目を覆うものの存在を気に止めていた。

「ねえアズ、その眼帯、ないと困るわよね。何を隠しているのかしら。人に晒したくないから隠しているのでしょうか？」

彼女はアズの自由を奪えることに喜びを感じているようだった。形勢は間違いなく、グレイスが優位だ。アズと取引などしなくても、彼女は思い通りに振る舞えるのだ。

危機の真っ只中だが、アズはひとつの可能性に思い当たった。

もしかするとグレイスがこの場所にこだわるのは、ただ怖がつて  
いるだけなのではないか、と。

「醜い傷？ それとも痣かしら？」

アズは問いに答えなかった。

奪いたければ奪えば良い。アズは別に困らない。衆目に晒したい  
ものではないが、グレイス一人に見られるだけならまったく問題な  
かった。むしろ、事実を知ってもらったほうが良いように思う。

すると灰色の髪が腕を這上がり、アズの頬を撫でる。そして、  
器用に眼帯を外し持ち去っていく。

左目には傷も痣もない。右目と同じく茶色い瞳があるだけだ。

「アズ、あなた」

グレイスの丸く見開かれた瞳から赤が引いていく。拘束が、弛む。  
「アズも同じだったのね」

彼女が見たアズの姿は、人間のそれではなかった。髪と同じ、黒  
っぽい茶色の獣に似た耳が頭部から生えている。人間にしても魔性  
にしても中途半端な姿だ。

初めはアズも怖かった。

誰にも受け入れてもらえないのではないか、この姿がバレたら殺  
されてしまうのだ、と。

眼帯は、この姿を隠すための封じだった。身体的バランスを故意  
に崩し、姿を人間優位に変えるための枷だった。おそらく、グレイ  
スのあの包帯もそうなのだろう。

「似てるだけだ、同じじゃない」

きっと、幼い頃のアズとグレイスは魔性に捧げられた子供として、  
似た境遇にあったに違いなかった。肉体や精神に魔性が混ざり込み、  
それを受け入れなければならなかった。だが、アズはこんな所で暮  
らすのは御免だし、人を襲う趣味もない。

グレイスはただ、寂しかったのだろう。アズには 母 がいたし、  
変わり果てた身を引き取ってくれる兄もいた。でも彼女は一人きり  
だ。

だから、敢えて言う。

「おいで、グレイス。人と暮らしたいならこんな所にいちや駄目だ」  
この子をひとりぼっちにしてはいけない。誰もいないのならば、  
自分が保護者になろう。

グレイスはふらふらと、アズの許へと歩き出す。

「……アズ、あたし、大丈夫かな。怖い、ずっと怖かったの」  
顔を覆って、グレイスは再び泣き出した。

「人のいる所に出ていって、魔性を暴走させてしまったら、って。  
そう思うと、ここにしかいらなかったの」

「……」

そういえば、アズとグレイスの間にさらに大きな相違点があった。  
アズは治癒魔術しか使えないから気にしたことほとんどなかった  
が、グレイスの魔力が暴走したらどうやって止めるのだろう。ま  
あ良い。乗り掛かった船だ。なんとかなる、……だろうか。

ほとんど解けてしまった灰色の蜘蛛の糸を振り払って、アズは手  
を伸ばした。

「もう心配しなくていいんだ。暴走、しかけたら止めてやるから」  
その手の先にいたのは人を喰らう魔性ではなく、一人の寂しがり  
の小さな少女だった。

そこに一歩足を踏み入れたアズは、きつい腐敗臭に顔を顰めた。  
グレイスの小屋の狭い別室には、たくさん人間が詰め込まれて  
いた。

村の青年と覚しき八人組、気性の荒そうな男が五人、何も知らず  
に迷い込んだらしい少女が二人。そして残りの十人は遺体だった。  
グレイスがいると問題があつたので、彼女には小屋の裏で待つて  
もらっている。一人にすることに多少の不安はあつたが、ここに  
いる面々に助けに来たアズまで敵視されては叶わない。

アズは生きている者の束縛を解いていった。

皆が解放を喜び合うなか、筋骨隆隆とした男が、お前のような若造に云々、と何かを言っていたが聞かなかったことにする。

さて、死者の弔いは後から村で行ってもらうとして、その遺体の中には、白骨化どころか、脆く崩れたものまであった。グレイスはいったい何歳なのだろうか。今はただ、生者たちを村まで帰すことが先決だ。

グレイスをひとり置いていくことに一抹の不安を感じていると、何かを察したのか、トトナ村の青年たちが率先して帰ろうと提案してくれた。

アズは彼らの厚意を受けて先に生存者たちを見送り、グレイスを迎えに行った。

何がいけなかったのだろう。

「アズ、みてみて。人だわ、人がいっぱいいるわ」  
窓枠に手を掛けて、グレイスははしゃいでいた。アズはいたたまれなかった。

「懐いたから連れてきたとはどういうことだ！」  
縮こまるアズの正面では、トトナの長が怒り狂っていた。  
グレイスがトトナ出身だと言うので、親戚や顔見知りがいるはずだった。

しかし、村長が生まれてから今まで、トトナ村は魔性に犠を捧げたことがないらしく、無論グレイスを知る者もなかった。彼女を連れて尋ね回っていたところを今回の生存者に見つけられたらしく、村長が駆けつけて来て宿に連れ戻されたのである。

戻ってきた宿の一室。アズは村長からお叱りを受けていた。  
「こいつは魔性なんだぞ！ お前には、常識というものが無いのか！」

この村長は、さっき泣いていたのと同じ人物だろうか。性格の違う双子ではないのか。疑いたくなる。

村の危機を救ったはずなのに、魔性に関わりがあると分かると急に冷たくなる。そういうものなのだ。今、眼帯を外したら、この説教は攻撃に変わるだろう。

「いいか、その魔性を連れてさっさと村を出ていけ！」

ばん、とでかい音を立て村長は扉の外に消えた。

急激に静かになる室内。

ふと、背後からグレイスの声があった。

「大丈夫よ、アズにはあたしがいるわ」

彼女は眉を八の字にして微笑んでいた。今に泣くのではないだろうか。似ているはずもないのに、鏡を見ているような錯覚に捕われそうになる。

「……そうだなあ」

アズは気が付いた　寂しかったのは、実は自分自身だったのか  
もしれない、と。

アズは馬車に揺られていた。初めての馬車にはしゃぎ疲れたらしいグレイスが隣で眠っている。

トトナ村で積み荷を降ろした馬車を捕まえて、グレイスの噂が御者の耳に入る前に忙しく出てきたのだ。

御者の男には悪いが、そうでなければ夜通し歩き通すはめになっていただろう。少し嘘も吐いてしまったし、謝罪の代わりに謝礼を弾もう。

「いやあ、あなたがたも大変ですねえ。トトナも魔性が出るって言いますし」

ちなみに、吐いた嘘とは「グレイスの母親が魔性が出る村に嫌気が差し、病気の娘を置いて出て行ってしまったのでそれを追って探しに行く」というものだ。

馬車が小都市オニテュに戻るらしいと聞いて便乗させてもらったのだ。

オニテュはセロム王国のど真ん中にある都市だが、湖に面しており、首都のザンヴァまで川を下って一直線の位置にある。船による国内の物流の中継地として栄えているのである。

「しかしオニテュも安全とは言い難いですよ。最近、魔性が出ているのですよ」

「え、そうだったんですか」

初耳だった。トトナ村に寄る三日前まで、アズはオニテュ市にいたのだが。

「ええ、人に憑く魔性なのです。被うこともできず人目に付かないよう隠してやるしかなくて」

人に憑く魔性。それは、自分たちと同じ状態のことではないだろうか。隠されているのなら、数日滞在しただけのアズが知る由もな



かった。それは当然だ。だが、この御者はそれを知っている。つまり、御者にとって身近な人物だということか。

「その人、紹介してもらえませんか。……これでも俺は治癒魔術師です。診たら何か解るかもしれない」

治癒魔術云々は嘘ではないが今回の件からはあまり関係がない。それでも理由なしに会わせてもらう訳にもいかず、はったりじみたやり方でアズは名乗りを上げた。

御者の男はいぶかしげに振り返る。アズの見た目からして、信じていないかもしれない。

しばしの沈黙の後、諦めたように男は呟いた。

「息子なのです」

目的地に着いたのは、住民たちが寝静まる頃だった。実際、着いたのは夕方暮れ時だったが、トトナからの積み荷を降ろすのを手伝っているうちに、こんな時間になっていた。

「今日はどうも、お疲れ様でした。もう遅い時間ですし、明日ここに迎えに来ますね」

御者の男ことフランクは宿の前まで馬車を付けて二人を降ろし、去っていった。

彼の紹介してくれた宿は旅商人がよく使う宿で、空き部屋さえあればどんな時間でも快く泊めてくれるという話だった。

中に入ると、ロウソクのぼんやりした灯りの下で年老いた男が椅子に腰掛けているのが目に入る。アズとグレイスの形を見て、彼は不可解そうな顔をした。引っ掻き傷だらけの眼帯の男と、包帯に覆われた幼い少女の組み合わせだ。さぞ奇妙奇天烈であろう。

泊めて欲しいと申し出ると、老爺はますます眉間にシワを寄せ、二人を遠慮なく眺め回した。

「一部屋しか空いてないが、それでいいかね」

グレイスが目の届かない場所にいるのは不安だが、同室というの

もどつたろう。アズはグレイスに目をやる。

「アズと一緒に部屋！」

彼女は楽しそうに跳びはねていた。ぎろり、と老爺に睨まれる。寝ている人たちの迷惑にならなければいいが。

……グレイスが同室でいいなら、それでいいか。

アズは宿泊を決めることにした。

案内された二階の一室に、わずかな荷物を抱えながら入る。グレイスに至ってはまったく持ち物がなかったから、明日するべきことが終わり次第、買い揃えなくてはならないだろう。

「すごい、ふっわふっわ！」

グレイスは早速駆け出して、部屋にひとつしかない寝台の上に飛び乗り、弾ませて遊んでいた。馬車で昼寝をしたせい、グレイスは異常に元気だ。夜中だということも忘れていないのだろうか。

「もう遅いんだから、遊んでないで早く寝ろよ」

アズがたしなめると、不満そうにグレイスはむくれる。

「変な気を起こしたら、ただじゃおかないんだからねっ」

「はいはい、おやすみ」

変な気など、誰が起こすものか。

ずっと森の中にいたくせに、どこでそんなこと覚えるのだろうか。

呆れつつ、疑問に思う。

アズはグレイスがおとなしく寝台に入ったのを確認して、床に毛布を敷き詰め横になった。

寝心地が良いとはお世辞にも言えなかったが、疲れ切っていたアズは、瞬く間に眠りに就いた。

まだ夜も明け切らぬ頃、グレイスは目を覚ました。二度寝をしよつかと思っただが、昨日眠りすぎたせい、かすっかり目は冴えざえとし

ている。

仕方ないのでむくりと起き上がり、伸びをする。

「……ここ、どこだっけ？」

ふと、思う。いつもの小屋ではない。小綺麗な部屋だ。

辺りを見回して、暗がりの中に床で丸まる青年の姿を発見する。

そして、安堵。

「あ、そか。アズについてきたんだった」

たしか、ここはオニテユとかいう都市の宿だったはずだ。

グレイスは寝台から降りて彼の顔を覗き込む。熟睡中だ。寝るときは眼帯を外してしまうらしく、無防備に正体を晒している。

「アズ、朝よー？」

つんつん、と頬に指を刺してみる。返事がない。疲れが溜っているようだ。起きてくれない。

朝というには少し早い、グレイスは暇だった。もう一度挑戦。

「アズー？」

今度は耳を摘んでみる。アズは小さな唸り声を上げて寝返りを打っただけだった。

つついても引つ張ってもらくな反応がない。つまらない。

それで、グレイスは、ちよつとした悪戯いたずらを閃いた。

「眼帯、隠しちゃえ」

満足気に笑い、グレイスは枕元のそれを掴み取った。

「うーん、いい天気」

日の出と共に、グレイスは朝の散歩に繰り出した。散歩は、森にいたときからの日課だった。ちなみに、アズはまったく目を覚まさないので置いてきた。今はグレイスひとりだ。

アズが起きる前には帰ろう　と心に誓った、つもりだった。しかし、そんなものは三步で忘れた。

「はっ。なにあれすごーい！　あんな高い塔初めて見たっ」

昨日もあつたはずだが、暗くて見えなかったのだろう。緑の屋根の尖塔が、空に突き出していた。何の建物だろうか。

きよるきよる。他に珍しい物を求めてあちこちに視線を向ける。

田舎者丸出しである。

「うわあ、こんな細い道まで石畳だー」

路地に入り込んで、さらに突き進む。抜けると、ちょっとした住宅地のようなのだ。

ふらふら。誰かの家から香ばしい匂いが漂う。朝御飯の香りもどこことなく上品な気がする。

「はあ、やっぱり都会は違うよねえ……」

空気を吸い込んで一言。

うろろろ。焦茶の小型犬が小路から早足で歩いてくるのを見て、グレイスは叫んだ。

「犬っ！　アズと同じ毛色！　かわいいっ」

グレイスに追われ、小さな犬は怯えて逃げる。文字通り、尻尾を巻いて。三つ先のブロックでその姿を見失い、グレイスは追跡を諦めた。

てくてく。オニテュの市街はどこまでもどこまでも続いているように感じられた。

「ん？」

何時間歩いたっけ、とグレイスは首を傾げた。気付けばもう、日は高く昇っている。

そして、今朝立てたばかりの誓いをようやく思い出す。アズが心配しているかもしれない。

慌てて元来た道を振り返ると、突き当たりに知った顔を見つけた。「フランクさん？」

向こうも彼女に気付いたらしく、こちらを向いて足を止めた。

これから迎えに行くところだったのだ、とフランクは説明した。近場なので、今日は歩きだった。すると奇遇にも、昨日の少女に出会ったのだ。

「ところで、お二人はどういったご関係なのです？」

兄妹というには全然似ていないし、母親探しをする気も感じられないし、アズは治癒専門だがグレイスが病気という割りには元気すぎるし、いい加減疑問だったのだ。

「あー、アズの妻なの！」

自慢気に少女グレイスは言い切った。

「あーなるほど。やっぱりそうでしたか」

勝手に納得するフランク。ちなみに彼の予想では駆け落ちのカップルだった。彼女はまだ子供のようだし、親に反対されて逃げてきたのだろう、と。

「馴れ初めは」

フランクは駆け落ちに遭遇するのは初めてなので、個人的に興味が湧く。

「なれそめ？」

言葉の意味が解らないらしいグレイスが首を傾げた。

「出会いのことです」

「出会いは、ねえ……森の中だったわ。それで、あたしはアズをお家にお誘いしたの。でね、あたしね……えーと、アズを縛って襲っ

ちゃったのね」

反応に困る急展開。いくらなんでも早すぎやしないか。しかも、この少女から？ あの男は幼女趣味ロリコンの上に、被虐趣味マソヒスト者なのか？

「……意外なご趣味ですね」

フランクは呟いた。聞こえていなかったようで、グレイスはそのまま話し続ける。

「で、アズがね、一緒に行こうって言うてくれて、あたしはついていくことにしたの」

そこで、少女は恥ずかし気に笑う。

最近の若者は理解できない、とフランクは思った。

アズが目覚めると、もうだいぶ明るかった。

カーテンを開いて外を見れば、朝というよりは昼前という雰囲気だ。

「……寝すぎた」

アズは頭を抱える。いくらなんでも、もうそろそろ宿を出るべき時間だろう。早いところ支度を済ませ、荷物をまとめなくては。

と考えて間もなく、気付いたことが二つ。

眼帯がない。

グレイスがいない。

これは、いったいどういうことだろう。アズは最悪の事態を想像して青くなる。

グレイスは本当に、人の中で暮らしたいと思ってアズについてきたのだろうか。アズを足止めし、逃げ出す理由があるのかもしれない。

例えば、森で人間を待ち構えるのに飽きて、街に出て自ら人間を捕まえることに魅力を感じたのだとしたら。あの今までの子供っぽいそぶりも演技だったとしたら。

それとも、グレイスの魔力が暴走してしまったのか。止めてやる

と言ったにもかかわらず、何もしてやれなかったのではないか。

魔性のことが知れたら、グレイスがどんな目に遭うか分からない。いくら強い力を持つ魔性だとしても、殺されているかもしれないのだ。アズが連れてきて、目を離してしまったせいで。何かがあったらアズの責任だ。

床の上、テーブルの上、寝台の隙間。

眼帯がないか、探したが見つからない。とりあえず、それがなければ外に出られない。もどかしかった。

もう、代用品でも良いだろうか。アズは引き千切るべきか、と煤けたカーテンを睨んだ。

ふいに、声が聞こえた気がした。

「ただいまあ。アズ、起きてるー？」

幻聴ではない。グレイスだ。生きていた！

アズは探し物を放り出して、扉を勢いよく開いた。

「グレイス！ 心配したんだぞ、いったいどこに……」

世話が焼ける少女の小さな体をぎゅうと抱き締め、ため息を溢す。無事生きていてくれるならそれで良かった。

「あつあつですねえ」

……あつあつ、とは何だ？

アズは顔を上げ、楽しそうに自分たちを見守るもう一人の存在に気付いた。

そして沈黙。

今、アズは寝起きの素顔を晒している。眼帯はない。人らしからぬ魔性の身体的特徴が現れている。中でも、ぴんと立った獣のような三角の耳は目立ってしまう。

目撃者がフランク一人だけだったのは、不幸中の幸いだろう。

慌てふためいて頭に手をやり、アズは苦笑した。

もう遅すぎる。

出直したい、と本気で思った瞬間だった。

グレイスはむくれていた。

「結果オーライなんだから、いいじゃない」

現在、三人は宿の部屋の中だった。アズは眼帯を隠した犯人を知ってグレイスを叱り付け、当のグレイスは不服そうに壁にもたれかかっている。そして、その二人の様子を見て、フランクはずっと何か口を挟みたそうにしていたのだが、

「そうですよ。悪気はなかったのですから……」

やっと発言したのはたった一言だった。彼は彼女を擁護したかったらしい。

結局、フランクは魔性に対して友好的な人種で、アズが普通の人間ではないことを知ってもほとんど動じなかった。眼帯を隠した犯人グレイスは、それを理由に開き直ろうとする。「そういう問題じゃないって言っているだろう。フランクさんも、あんまり甘やかしてはダメです」

だが、アズはそれを認めなかった。

下手をすれば通報されていたのだ。悪戯と言えども命に関わる結果になりかねなかった。

「罰として、買い出し」

アズは、メモを差し出した。簡単な買い物だ。朝食や必要な品を買ったための店を示した地図と、数枚の硬貨も添える。

「買ったなら先に食事を済ませていて構わないから。この辺りで落ち合おう」

アズは地図の一点をグレイスに向けて指し示した。

朝の散歩の件で、一応単独行動はできることが証明されたはずだ。簡単な買い物程度ならできるだろう。

「罰と言っても、やはりそのくらいが妥当ですよね」

実害も悪意もなかったのですし、とフランクが納得する。



「ええー」

アズと一緒に行ききたかったのにー、と不満の声を上げるグレイス。  
「買い物くらいはできるよな……?」

「馬鹿にしないで!」

彼女は地図を握り締め、胸を張る。ぷんすか、という擬音がよく似合う怒り方だった。

「買い出しのことは、このあたしにまかせなさいっ。絶対に間違いなく買ってみせるから!」

それを聞いてアズは、なんだか余計に不安になった。

静かでささやかな住宅が立ち並ぶ区画。アズはフランクに案内されて、その中を歩いていた。この辺りはオニテュの市街地で働く者が多く住み、日中は人気がない。

「むしろ安心しました」

歩きざまにフランクに聞いたところ、そんなふうに言われた。

赤の他人だから、と気軽に打ち明けたつもりだったが、思った以上に食いつかれたので急に不安になったのだと言う。言葉巧みに近づいてきて、息子を始末するつもりなのではないか、と。

しかし、息子を救える可能性があるなら藁にでもすがりたかったフランクは相談だけでもできれば僥倖だったのだ。なにしろ、魔性の話をしたら大抵の人間は嫌がる。

そこで、アズの素性を知った訳である。

「……魔性が怖くないんですか」

普通の人間なら怖くて当然だ。常識的に考えれば、魔性は害悪に違いないのだから。

「ええ。はじめはとても恐ろしく思っていました。でも、あの子が憑かれてから間違いに気付いたのです。少なくとも、魔性憑きは恐れるものとは限らないのだと」

フランクは『魔性憑き』という表現を使ったが、アズは違和感を

覚えていた。

アズの意識は既に混合してしまっている。憑いている側であり憑かれていた側でもあるのだ。決して、アズは魔性に憑かれていた訳ではない。人間の体を奪った魔性としての意識も強く残っている。

確かなことは、当時死にかけていたアズの中の魔性が、差し出された少年に取り憑き生きる誘惑に抗えなかったこと。そして、少年としての怯え。

あの時、魔性が憑かなければ、少年は普通に生きられたはずだった。その事実が、アズの中では魔性の罪悪感であり、少年の絶望でもあったのだ。

決して、魔性として人間になりたかった訳ではない。これは償いのようなものだ。命を繋いで貰った恩を、仇で返したくはなかった。人間として生きることの叶わなくなってしまった少年に、魔性として生きるというのは酷すぎた。せめて人間の中で生きられれば。

それで、現在アズは人間の中で暮らすという選択をしている。きっと、フランクの息子とやらも、アズと同じく『人間寄り』なのだろう。

魔性を善悪だと考える者からしてみれば、アズのような存在がどのように思われるのか、想像に難くない。『魔性に取り憑かれてしまった可哀想な人間』『魔性憑き』と。

アズは人間の振りをして暮らしているが、魔性の部分も間違いなく半分を占めている。幸か不幸か相性が良かったらしく、最近はずっかりお互いの精神が同調してしまっただけで思考の境目が判らないことが多いのだが。ちなみに、相性が悪くうまく融合しきれなかった精神は、どちらが主導権を握るかで争い、一方の精神がもう一方を殺してしまうこともあるらしい。そんな場合、大抵勝つのは魔性の側だ。

そんなこともあって、『魔性憑き』は人間よりも魔性に近い生き物だとアズは思う。人間の精神は脆いのだ。人間たることを否定されたら、壊れてしまう。そして、『魔性憑き』を受け入れられる人

間など、おそらく世界中に数える程しかないのだ。

「あの子は本当は優しい子なのです」

フランクと、元少年の兄。受け入れてくれる人間はいても、人間の心は歪んでいってしまう。魔性の心よりも、変わってしまったやすい。ただでさえ精神が混ざり合ってしまうのだ、元通りの『本当の』息子はもう戻って来ない。

「どうか、ニックを助けてやってください」

フランクが低頭する。

アズにできることはそう多くない。助けが必要かどうかさえ、よく分からない。実際はどうだが、会って確認してみる必要があった。

ニックは十歳になったばかりだった。五年程前に母親を病で亡くしてからは、フランクが男手ひとつで育ててきた子供だ。

妻が亡くなって以来、フランクはニックを馬車に乗せ、いつも仕事場に連れていた。もうそろそろ仕事の手伝いも卒業して、まだ一人前とはいえないが、簡単な仕事は任せられるようになる頃だった。しかし、事はそううまく運んでくれなかった。

雲ひとつなく晴れたある日、フランクはいつものようにニックを連れて馬車を走らせていた。

もうすぐ走ればオニテュに着くな、と思った時、フランクの真上の空がかげった。

見上げると、両翼を広げた鳥によく似たシルエットが不安定に滑空していた。鳥かと思ったがよく見れば違う。胴体には獣のような体毛が生え、尻尾がはためている。

ふらついで高度を下げるそれが、うまく飛べていないのは一目瞭然だった。

「父さん、あれ、飛ぶ練習みたいだね」

フランクは、少し離れたところを先行して飛んでいく親の姿を認めた。

子連れの魔性は気性が荒いとよく言うし、魔性が輸送の馬車を襲うこともある。警戒するに越したことはない。

「ニック、危ないからお前は隠れていなさい」

ぎしぎし、という妙な鳴き声が親鳥のほうから聞こえたのは、フランクがそう言うのとほぼ同時だった。

「ぼくは平気だよ！」

不満気に主張して見せたニックにも、変化が訪れていた。

ぼんやりと輪郭を包む蒼白い光。

「……え？」

「どうした？」

そして、ニック目掛けて真っ直ぐに墜ちてくる魔性。その体も淡く輝いているように見えた。

体を薄く覆っていた光は、勢力を拡大し周囲の空気をも侵食していく。

強い光に飲み込まれる二つの小さな影。

フランクは直視することができず、目を細め、思わず目をそらした。

光が弱まって、フランクが荷台に蹲ひづるものを見たとき、そこにいたのは、もう『ニック』ではなかった。

翼が生え、羽が生え、獣のような姿の少年が、怯えた目をしてへたり込んでいた。

「……と、うさん？」

「本当に、ニックなのか？」

上空を旋回し続ける親鳥を見上げて逡巡したまま、少年は黙ってしまった。

「……さあ、これを被りなさい」

フランクは、毛布を手渡した。

「このまま街まで突っ切ろう。大丈夫、見捨てはしない」

とにかく、フランクはそのニックと覚しき少年を連れ帰り、自宅の一室に匿うことにしたのである。

アズが通されたのはカーテンを閉め切った薄暗い部屋だった。

窓が開いているらしく、カーテンが風で揺れ動いている。部屋の中は、物が散乱していて足の踏み場がない。部屋そのものはまだ新しいから、これでは、グレイスの小屋とまるで対極の状態だ。

「ニツク？」

ベッドの上に寝ているはずのニツクを起こそうと、フランクが揺するがまるで反応がない。違和感に気付いた彼は、上掛けを捲り上げた。

フランクの息子であるというニツクはそこにいなかった。ベッドの上には、彼の代わりに丸めた毛布が横たわっていたのである。

「逃げた」

渋い顔をしてフランクが呟いた。

## 尋ね人 1

市の広がる辺りには、人が集まる。グレイスはその中で、うきうきと心躍らせていた。

雑踏の中に身を置くと、改めてそれを感じる。

つい昨日まで、グレイスは、一生をトトナ村の外れの森で終えるものだと思っていた。それが、アズに引っ張り出されてこんな大きな街にまでやって来てしまった。不思議なものだ。

今も、グレイスの目と鼻の先をたくさんの通行人たちが行き交っている。彼らは包帯を巻いたグレイスの奇妙な形なりを見ても、敵意を抱いたり逃げ出したりしない。少し視線を向けてくる者もいるが、あくまで無関心を装おって通り過ぎていく。そして、一度往来の中に紛れてしまえばグレイスさえも街の中の一人にしてくれる。なんて心地良いのだろう。心なしか、足取りも軽やかになる。

アズに渡されたメモを握り締め、グレイスはそれを読み返す。メモは簡潔だった。

『必要な物があれば買うこと。朝食はきちんと食べておくこと』  
その下には、必要な物リストも記述されている。グレイスはそれから目を通して、さっそく買い物を開始した。

「まずは……服、服と」

グレイスは辺りを見回して、それらしい店を探す。噴水を中心とする広場を取り囲むように多くの商店が軒を連ね、その壁際や広場には、店を持たない商人たちの露店が溢れている。

ちょうど、グレイスのいる場所とは対極に一件、それらしき看板を出した商店があるようだ。それを確認して、グレイスは広場を横切ろうとした。

「そこのお嬢ちゃん！ どうだい、安くしとくよ！ なんと、この髪飾り、かの辺境エンセリオ産の珍しい品なんだがね」

だみ声の露店商が、グレイスの長い灰色の髪をさわさわと撫で、

髪飾りとやらをあてがう。かわせずにはグレイスはたじろいだ。

「髪の色に映えて、よく似合うなあ。まるで誂あじえたみたいだ！」

「えーと。あたし……」

困った。どうやって逃げれば良いのだろうか。それに、この露店から離れても、次から次へまた客引に引つ掛かってしまったら目的の店まで辿り着けないのではないだろうか。

それにしても、早く立ち去りたい。そう思つてグレイスが身を竦すくめたとき、

「ねえ、その君」

声の上から降つて来て、彼女は何事かと見上げた。

金髪の青年の青い瞳が、グレイスの顔を覗き込んでいた。なかなか派手な顔立ちをしていても身なりも良くて、お金を持つていそうだ。そんな人物がグレイスに何の用だろう。

「おひとり？」

彼は胡散臭そうな笑顔で尋ねてくる。変な男だ。警戒しても良いくらいなのだが、どこか引つ掛かる。見たことのない顔だし、声も知らない。それなのに、どこかで会ったことがあるような。

なんだろう。なんとなく落ち着くのだ。

アズに似ている？

グレイスは彼のことを思い浮かべて目の前の青年と比較してみる。……いや、似ていない。少なくとも外見は。アズは髪も瞳も落ちていた茶色だし、顔の造りも似ていない。それに、この男と違って胡散臭い笑みを振り撒いたりしそうにない。強いて似ている箇所をあげれば、年齢や背の高さは同じぐらいだろうが、そんな人間は掃いて棄てるほどいるし。

「お嬢さん？」

グレイスの考え事を遮つて、彼が呼び掛ける。なかなかしつこい。どうしてもグレイスとお茶したいとか、金に物を言わせてグレイスを自分好みに仕上げようとしているとか……。グレイスの想像力は果てしない。

「ごめんなさい、せつかくのお誘いだけど、あたしには一生を誓った夫がいるの」

「いやいや、そうじゃなくてさ」

彼の目的はグレイスではなかった。

「人を探してるんだ」

相変わらずの笑みを崩さぬまま、彼は言った。

金髪の青年は、一抱えひとつかの物品を両腕に抱えながら、その隙間から顔を覗かせる。彼は親切なことに、グレイスのお遣いの手伝いを買って出してくれた。要するに荷物持ち兼護衛といったところだ。護衛といっても、ただ彼女を強引な客引から守るだけのことなのだが、「アートってば、出たっつきりほとんど顔を見せないし、兄と姉ちゃあ心配じゃないか。せつかく見つけたんだし、久しぶりに話くらいはしたいんだよね」

金髪の青年、もといギルは双子の弟を探していた。というか、家を出て行った弟を旅先で偶然にも見掛けてしまったのだという。

しかし、グレイスなんぞにこんな話をして、意味があるのだろうか。

「それで、どうしてあたしに？ 探し物はあるんまり得意じゃないんだけど……」

グレイスはギルを見上げる。

「あのさ、今朝グレイスちゃんと一緒にいた若いのがいるだろ。僕はその人に会いたいたいんだよね」

アズのことか。グレイスにはよく解らないが、アズと彼の弟のアートとやらに何か関係があるのだろうか。彼の弟の居場所をアズが知っているということなのか。

「アズを紹介すればいいのね？」

「アズ？ あー、確かそう名乗ってたっけね。ま、だいたいそんなもんかな」



ギルはそんなものはどうでもいいとばかりに適当に言い放つ。そのとき彼が浮かべていたのは人当たりの良さそうな作り笑いではなく、紛れもない苦笑だった。

悪い人ではなさそうだと、とグレイスは判断する。なんだかんだと助けてくれたし、どこかはまったくわからないけれどそこはかたなくアズに似ている気がするし。

「じゃあ、ちよつど良いから、合流地点で一緒に待つついでに荷物を運んでくれる？」

上目遣いで、グレイスは提案した。そうしてくれるとかなり助かる。

「りょーかい、グレイスちゃん」

楽しみだなあ、とギルは笑った。

## 尋ね人 2

この風変わりな少女に付いて行けば、そのうち弟に会えるらしいことが分かって、ギルは安心した。とりあえず、落ち合つのはどんなのか、ギルが質問しかけたとき。  
ぎゅるるう。

グレイスの腹の虫が鳴いた。

「ま、まずはご飯を買いましたよ」

彼女は頬を染めてひとつ咳をし、再び広場の方向へ踵を返した。

「おい、待ちやがれっ！」

砂埃の匂いと共に、怒号が飛び込んで来た。ばたばたと激しい足音が響いている。後方が、なんだか騒がしい。

「くそつ、誰かそいつを捕まえる！」

「この、魔性め」

それを聞いたグレイスがびくりと肩を震わせた。

魔性？ まさか、アートが？

ギルも振り返ると、追われているのは翼の生えた少年だった。少年には気の毒だが、弟の無事を確認して思わず胸を撫で下ろしていた。

父フランクには部屋にいるよう言いつけられていたが、『母』の鳴き声が聞こえた気がして思わず飛び出してきたしまった。

それがきっかけで、ニックは追われる身だ。巡回中のオニテュ治安維持団に出会ってしまったのである。追っ手は下級の騎士二人。下っ端といえども相手は成人男子だ。年齢よわい十やそこらの子供が一人で立ち回れる訳がない。だから、ひたすら逃げる。

人混みを掻き分けると、面白いほどすっぱりと二つに割れ、群衆が離れていく。

ニツクは走っていた。全力疾走だった。

息が切れる。この翼で、飛べるものなら飛びたかった。しかし無理だ。体が重すぎる。そのうえ、しばらく外に出なかったせいもあって、体は鈍なまってしまっている。

後ろを振り向けば、オニテュ治安維持団の騎士二人はすぐそこまで迫って来ていた。彼らは以前なら頼もしくさえあったが、今では脅威でしかない。足の速さは比べるべくもないが、とにかく逃げなくてはならない。

「え」

後ろなど見なければ良かった。わずかな段差に足を引っ掛け、バランスを崩してしまった。

「うそッ」

そうこうしている間にも奴らは迫り来ているのだ。来る。逃げ切れない。

殺される。

石畳に手を付いて、ニツクは転んだ。掌が擦り切れてひりひりと痛む。それ以上に胸が痛い。呼吸が苦しい。視界が滲む。

死んじやいそうだ。

だが、死んでなどいられない。

歯を食い縛り、ニツクはもう一度膝に力を入れた。

立ち上がって再び走り出そうとした。しかし無情にも、先程までの全力疾走がたたって、足がもつれて思うように動かない。

数歩も進まないうちに、ついに追い付いた騎士の一人に、背後から羽根を掴まれた。否、むしり取られた。

「痛っ！」

耳元で笑い声が聞こえる。

「やっと捕まえたぜ、畜生」

首根っこを掴まれて、ニツクは自由を奪われた。

「放せ放せっ、放せ放せはーなーせーッ！」

じたばたと暴れてニツクは精一杯抵抗しようとしたが敵わなかつ

た。男の一人に一発殴りつけられる。左の頬が痛い。

「るっせえなア、死にてえのか！」

さらにもう一発。今度は腹部に痛みが走る。蹴られた。

「　　つくあ」

「これだから魔性は嫌なんだよなあ」

魔性。

「まだ魔術も使えねーようだから楽でいいけどよ」

自分は魔性なのか。

その事実には愕然とする。確かに、魔性でないとは言切れない。

けれど、父は「ニツク」と呼んでくれる。「ニツク」は人間だった。

……ぼくは「ニツク」じゃないの？　だとしたら、ぼくは、何？

ニツクの中で何かが崩れた。

もう動けない。動けなかった。

無抵抗のニツクに対し、とどめとばかりに鳩尾みぞおちへの打撃が見舞わ

れた。意識が遠のいていく。

ニツクの小さな体は担かがれ、運ばれる。少年は、もう何も感じな

かった。

少年は男たちに連れて行かれる。あれは争いとすらいえない、ただの暴力だった。

「酷い……」

グレイスは一步身を乗り出して、今にも飛び出して行きたかった。

「落ち着きなつて。んなどこで暴れたって意味ないよ」

「でもっ、このままじゃ、連れてかれちゃう」

知らん振りを決め込むつもりなのか。グレイスが魔性として扱われる気持ちを知っているぶん、非情に聞こえてしまう。

「だから？」

グレイスはすっかり忘れていたが、ギルはついさっきそこで出会ったばかりの人間だった。決して、魔性に同情してくれる感性の持

ち主とは限らないのだ。

哀しくてグレイスは項垂れた。

それをどう受け取ったのか、ギルはグレイスの肩をぼん、と叩いた。

「今出てつたらただの馬鹿。時と場所は、ちゃんと弁えなきや、ね？」

まさか、今の言葉は、肯定？ 驚いて顔を上げる。ギルは数ブロツク先をじつと見ていた。翼の少年はその角に消えたのだらうか。とにかく、もう既に魔性騒ぎは収束して、広場は元通り何もなかったかのようだ。

「で、とりあえずなんか食うんだっけ？」

ギルの笑みも、また元通りだった。

「ええ、アズのぶんも買つときましょ」

その後は手近な屋台で買った軽食を頬張りながら、待ち合わせの店の前の長椅子に腰掛けてアズを待った。

「そついえば、グレイスちゃんは夫がいるとか言ってたけど、その小さ、いや、若いのにもう？」

「うふふー、実はねっ、あたし、アズの妻なのよ」

「……へえ？」

そんな感じの会話もした。

噂の本人は、息を切らしながら駆けてやって来た。その姿が現れたとき、真つ先に反応したのはグレイスではなくギルだった。

「アート！ 失望した！ おまえが幼気いたいけな女の子に手を出すなんて！ そんな子に育てた覚えはありませんっ」

「……は？ ギル？ 一体何の話を？」

ギルに「アート」と呼ばれた彼は、まったく何を言っているのかさっぱり解らない、とでも言いたげだ。とぼけている、というより本気で。

あれ？

「あ、やっぱり？ 本物のアートだよな？ 会いたかったんだ。心

配したじゃあないか」

もしかしてアズがアートだったのか。アートがギルの弟ということとは、アズの妻とギルとは義理の兄妹ということだ。わあー、あたしってば天才！

「ギル、これからはお義兄さまと呼ばせていただきます」

ギルに向かつてそう挨拶しようとしたら、何故か、またアズに怒られた。きつとこれも愛故ゆえよね……？

グレイスが妄想を膨らませている間にも、アズとギルは話を続けている。

「そんなことより」

「そんなことつてどういうことだい、感動の再会場面クライマックスじゃないか」

ギルが言い張ったが、その主張はスルーされた。グレイスだってそんなの認めない。クライマックスは愛の告白場面に決まっている。

「そんなことより人がいなくなっただ、探すのを手伝ってほしい。話はその後で聞く」

駆け足で来たのはそういう理由だったらしい。アズはフランクの息子の話から、例の息子が部屋から消えていたことまで、「魔性憑き」のことも含め説明していく。

「……それつてもしかして、さっきの子じゃない？」

グレイスとギルは顔を見合わせた。そして数秒の躊躇ためらいの後ギルが断言した。

「それなら、手伝うまでもなく、すぐに解決してやれるよ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0569w/>

---

SWitch

2011年12月29日16時49分発行